

訪問日：平成22年9月15日

訪問者：石川、加藤



地域と自然、人と人をつなぐ

博物館を目指して



加藤貞亨さん

(鳳来寺山自然科学博物館 館長)  
東京での一般企業勤務を経て、平成元年より鳳来寺山自然博物館で事務職員として勤務。平成7年に学芸員の資格を取得後、平成17年から館長に就任。専門は『きのこ類』と県の鳥『コノハズク』。

鳳来の自然に魅せられて  
 ▽今回は新城市門谷にある鳳来寺山自然科学博物館の館長、加藤貞亨さんを訪問しました。  
 今年で開館47年、約半世紀もの歴史をもつ鳳来寺山自然科学博物館には、奥三河地域を中心に地質、植物、動物等に関する莫大な資料が収集・蓄積されており、愛知県の自然の歴史を語る数少ない自然博物館の一つとなっています。  
 加藤さんは博物館の館長兼学芸員として、郷土の豊かな自然を活かした自然観察会や展示による教育普及活動



玄関を入ったロビーの一角。新城地方の多彩な岩石20種が並んでいる。

動を中心に、奥三河地域の自然調査・研究、資料の収集・保存など、多岐に渡って精力的に活動されています。今回の取材では地元出身の加藤さんならではの視点から、館内の展示を交えてふるさとの自然の魅力を存分に語って頂きました。

ゼロからのスタート

加藤「実はもともと博物館を目指していた訳じゃなくて、学芸員の資格も博物館に来てから取得したんです。それから鳳来町が新城市になったのと同じに館長になったんです。」

(博物館を希望された理由は?)

加藤「ひとつに自分の地元だということがありました。今まで自分がやってきた事が活かせるかどうかは別としても、こういった自然のことに関わる仕事というのは非常に魅力がありました。もともと鳳来という地域が大変自然の豊かな地域であり、全国的にもよく知られているということもあって、その自然博物館にやりがいと魅力が感じられたことです。」

(自然が相手の仕事では、実際にやられて苦労したことも多いのでは?)

加藤「そうですね。一番大変だったのが何もかも全く分かっていなかったということ。自然の仕事に漠然とした魅力を感じて仕事を始めたため、最初の頃は実際にお客さんに聞かれて、分からないことを調べての繰り返しでした。まさにゼロからのスタートでした。」

博物館を支えるヒトのつながり

(館長さんの思う鳳来自然科学博物館の特徴は?)

物館の特徴は?)

加藤「観察会や展示会に力をいれていますが、特に観察会では子供さんの参加率が非常に高いですね。そのベースには、博物館の一番の特徴でもある『友の会』という組織があります。今年度では650人以上の皆さんが入会していただき、博物館により近い立場で、サポーターとして、またはリピーター、パートナーとして関わっていただいています。そのように施設にいる人間だけでなく、博物館と関わってくれている人々と上手く連携をとりながら活動を広げていくことも考えていきたいです。人のつながりをしっかり構築することによって、将来的には博物館からだけでなく、地域全体から情報発信



『友の会の活動紹介コーナー』

できるようなになればと願っています。」

実物に触れる。本物を知る。

(最後に、様々な活動を通して、館長さんが子供たちに一番伝えたいことはどのようなことでしょうか?)

加藤「まず実物に触れると言いますか、本物を知る機会を出来るだけたくさん持つて欲しい。それは子供たちだけでなく、大人の人がそのような機会をどんどん作ってあげないといけないということも伝えたいですね。子供だけで川に行くのも難しい時代になっていますから。」

ただ、それは世の中全般的な流れでもありますし、それが出来ないならうちの博物館での観察会や展示会なんかを通して、より多くの子供たちに実物に触れてもらう。本物に接してもらえる機会を作ってあげたいと思います。」

(それが博物館の役割であり、館長さんの役目ということになるのですね。)

加藤「そうですね。」



保護されたオオコノハズクがお出迎え。小ささにびっくり!?(体長約25cm)



左写真はCOP10にちなんだ特別展示会。テーマは「あいち奥三河の自然と多様性」今年、名古屋で開かれたCOP10では、愛・地球博記念公園で新城市としてブース展示を行い、新城市の自然を紹介した。